

ピート・タウンゼント・インタビュー

11月の発表に向けて『四重人格』をまた取り上げていますが、その資料を振り返る一方で、何か「再発見」したものはありますか？

とても重要なことを1つか2つ、発掘した。そのことについては、ライナー・ノートでかなり長く触れるよ。隠しているわけじゃなくて、ここでその話を明かしてしまうと、この11月のライナー・ノートを読む楽しみが損なわれてしまうだろうからね。

..または、あの作品について何か新しく思いついたものはありますか？

『四重人格』のことは、ここ数年、頭にあった。ものすごく誇りに思っているし、しょっちゅうそれを口に出している。だからついリミックスに仕上げたときは、どんなにいい音でオリジナルのフーのレコーディングが響くかに喜んだけど、悲しいかな、俺のデモの幾つかはかなりひどい状態で、一部はほとんどダメになってしまっていた。だが、ちょっと手を加えることで、辛うじて平均レベルに戻せたと思う。俺のデモは全部、自前のスタジオでミックスしたんだ、すごい低音レベルでね、それからマイルス・クラーク(元オーシャンック・スタジオのアソシエイト・エンジニアで、何か俺が聞き逃していないか「科学的に検証する」リスナーとして作業する)が俺のホーム・スタジオに来て、それをグッと引き締めてくれた。でもほとんどそんな必要がなくて嬉しかったよ、ミックスのひとつで彼には聞こえた携帯電話のおしゃべりは聞き逃してしまったけどね。

このような捉え直し作業の経緯というのは、どのようなものですか？プロジェクト全体はどう開始しますか？

このリリースは、ライブ・アット・リーズ&ハルのパッケージを見事に成功させ、他にも手掛けたかったユニバーサルの英国カタログチームの提案によるものだ。昨今のレコード業界では、カタログは重要な役割を果たす部分で、アーティスト&レパートリー(訳者注:新人発掘や企画制作等)や新人アーティストを活かすサポートを守るための利益を生み出す方法なんだ。



業界は尻に火が付いた状態かも知れないが、全焼しきってはいない。以前から『四重人格』には、もう一度取り組みたいと願っていた。よくあることだが、スタートし出すと、「そいつを終わらせたい」と望むことで、気が散って中断してしまっている。つまり、俺にはあのストーリーをもっと従来のままにしておきたい衝動があるんだけど、そうなるとうたぶん劇場の方が上手くいくだろうね。それに俺は昔から素晴らしいサラウンド・サウンド・バージョンをミキシングしたかったんだ、当時俺にあった、4チャンネルというすごいアイデアに反対する連中にちょいと見せてやりたくてね。その点に関しては、ライフハウス・イズム(実現不可能だった過去を現代に追いつかせようとする)に気を付けなとな。この場合で言うと、リミックスはなかなかはかどらなかったが、ライナー・ノートでは自分を「クリエイティブ」にしておいた。1970年から1973年にかけての3年に渡って次々と展開して行くストーリーや、あんな風に終わった理由について語るのは、オリジナル・アルバムの制作を再現するようなものだし、殆どはいい思い出だからね。

www.nakedeye-online.com

ピート・タウンゼント・インタビュー

始めたのは、3つのアーカイブを深く探求することからだ。元ツアー・マネージャーのビル・ハリソンが預かっていたザ・フーのテープ、俺個人のスタッフが管理する自分のライブラリ、それに私的アーカイブ(デモ、日誌、書類、歌詞、書簡、写真、ノート、図表など)。こういった3つのアーカイブを真剣に再編成し始めたのは2月だから、再び自分の記憶を整頓した頃には全てが手元に揃っていただろうね、だからユニバーサルがライナー・ノートや新しい作品をやってくれないかと尋ねてきた5月頃には、すっかり準備が整っていると感じたんだ。

数年前に遡って、あなたが『トミー』の5.1 ミックスを手掛けたとき、僕たちは『四重人格』にも同様の処置を施すことを語り合いました。アルバム全体が完全に5.1 ミックスではないのは、何か理由があるのですか？

2003年には、5.1に強い期待を抱いていた。今なら標準的なフォーマットで、オーケストラの音楽や、その他もろもろの申し分のないオーディオ作品が聞けるが、映画DVDを除けば、実際にはまだ少しも始まっていなかった。もちろんオリジナルのフーのアルバムが発売された1973年だって、4チャンネル・サウンドなんて全く可能な状態ではなかったのだから、特に驚くことでもなかったが、オーディオマニアが熱中するハイ・ファイ装置は、ほとんどの人にとって、あまりにも高くつく取引だ。iPodなんかでステレオ再生を聞く者に対し、5.1で聞く者の割合は、約500対1か、もっとひどいだろう。完全な5.1 ミックスのためには、ファンからの十分な需要があるのかを確かめたかったんだ。もしあるなら、今度の2012年の春に行ない、共有ダウンロード(又はそれに近いもの)を通じて、この11月のパッケージ購入者に対して無料提供できるようにするだろう。俺の意見では、俺達の選んだ6曲をボブ・プリデンが5.1にミキシングしたものは、今までに聞いたどのフーのレコーディングよりもベストなサウンドを表現している。これぞ俺の意図したかたちで響く『四重人格』だ。だがそれは、1973年の8月に俺がロン・ネヴィソンとミキシングしたステレオ・ミックスほどの重たくアグレッシブな響きではない。

もしこのような、もっと大人しくて広がりのある5.1バージョンが1973年にリリースされていたら、フー・ファンはあまり満足しなかっただろう。それまでには『ライブ・アット・リーズ』を経験してしまっていたからだ。だが比較のため、オリジナルのトミーのアルバムが、その最もパワフルなライブパフォーマンスと比べるとどんなに大人しいかを振り返ると面白いよ。

「ラジオ2」での最近のインタビューで聞いたのですが、あなたは発売時にロジャーが失望していたことを話していました。ミキシングやジャケットだとか、ライブ演奏での問題に対してです。当時と何か違うことが出来たとすれば、それは何でしょうか？

もっと時間が必要だったよ、ジャケット・アートを再考し、リミックスし、リハーサルするのにはね。どうしようもなかった。これについては、少し詳しくライナー・ノートで述べる。1973年、ロジャーはどんなネガティブな部分も十二分にカバーしたんだし(そしてもちろん彼は見事に歌いあげた)、いずれにせよ、当時の彼の決定が正しかったことに同意する者は多いだろう。もっと時間があれば、リハーサルの合間に、あんなに深刻な、身体を張った喧嘩はまずなかっただろうね。それに初期のゴタゴタした公演に俺がぶち切れることもなかっただろう。二人とも、あんなに素晴らしいプロジェクトが、新しいフーのライブ公演のための屋台骨を築くのに失敗するのを目にし、ひどく失望させられた。俺たちは『トミー』のことを誇りに思っていたものの、年がら年中それを演奏することにはウンザリしていた。これは全てライナー・ノートでかなり詳しく取り上げるし、そのほとんどが2012年の俺の回顧録にも掲載されるだろう。

ピート・タウンゼント・インタビュー

『トミー』がツアーされた期間の長さを考えると、『四重人格』があんなに早くステージ演目から降ろされたことへの失望はいかほどでしょうか。

降ろされたんじゃない、上にほのめかしたように、リハーサルの時間が足りないせいで、しっかりと定着したことがないんだ。もう一度言うが、ライナー・ノートでその正気の沙汰じゃない出来事を年代順に説明する。俺が悲嘆にくれていたというのは大げさじゃなかったと思う。だからこそ、俺達が1997年、あんなに長いこと休止した後で、ビデオスクリーンに物語を映し、素晴らしいバンドを従えて、もう一度あれを演奏し始めた時、俺はザ・フーとの活動に戻ったんだ。俺たちがぐるっと一巡りして元に戻ったように感じたよ。

このプロジェクトは明らかにあなたにとってエキサイティングな取り組みであり、確かにずっと何年も僕が楽しみにしてきたものですが、何故こんなにも、その音楽とストーリーがずっと通用するのだと思いますか？

あの音楽は俺から出ているのも同然で、ソング・ライターとしての自分の幅広い技量が多岐に渡っているのを、ひとつに集めたものだ。それにザ・フーや、個人的には俺にとって、あれは非常に大切な時間だった。俺たちみんな、バンドは本当にスタジオで熱くなっていたし、それにあれは素晴らしい共同制作だった。ロン・ネヴィルソンの役割も過小評価しちゃいけない。(だからこそ、俺たちは映画『トミー』のサウンド・トラック・アルバムですぐにまた一緒に取り組んだんだ。正直なところ、それ以上一緒に続かなかったことに驚いている)あのストーリーが持ちこたえるのは、それがすぐに効き目があるからだ:リスナーを簡単に筋書きに入り込ませ、彼等が中心人物なのかもしれないと思込ませる、ヒーローなのだぞ、とね。これについては君と色々なことを議論したから分かるだろう、マット、この「空っぽのコップ」というシステムが、最高の近代音楽での核心であるべきだと俺は思っている:音楽やテーマの進展、それにももちろん適切なファクションとイデオロギーのセッティングによって支えられている、聴衆の彼(または彼女)が、完全に一体感を得られて、彼等自身のものにさせる、リスナーが占有してしまえる場所(あるいは実際に演じている演技ですらも)だ。

更に何か、公演の劇場版を思い描いていますか？

いる。作業は今、2009年に英国サマー・シアター・ツアーで活性化した、洗練されたバージョン(実際には完全に新しいもの)をもっと綿密にしているところだ。その権利はまだ、その2009年のツアーでプロデューサーの一人だったアイナ・メイバッハにある。来年早々にはワークショップがあるかもしれない。

あなたは来年『四重人格』ツアーをするだろうと発表しました。かなり最近ですが、ロイヤル・アルバート・ホール公演の後、ライブでの上演だとストーリーを改訂する必要があるとロジャーが語ったと伝えられました。大幅な変更は考えていますか？

ツアーはやりたいが、まだ予定にはない。2010年3月のロイヤル・アルバート・ホール公演をやってからというもの、ずっと準備は出来ているし、やりたいと願っている。それがスーパー・ボウルの後に当然続くと思っていたんだが、ロジャーには別のプランがあったし、それにソロ・アーティストとして自分のツアーのバンドを伸ばし、バンドのリーダーとして自分の本当のエピファニーを楽しみ続けているんじゃないだろうか。文句は言えない、俺自身も長いこと時々、ディー・エンド、サイコデリクト、ライフハウス・クロニクルズ、それにジョン・キャリンと一緒にスーパー・クラブ公演と、同じことをしてきたんだ。俺の意見では、2010年のロイヤル・アルバート・ホール公演に大幅な変更は必要ないと思う。だが、ロジャーはオープニングを書き直したいんだ、あいつはジミーのナレーター(内なる声)で、ジミー本人じゃないということをはっきりさせ、気付かせるためにね。あまり面倒くさいことをしなくても必要なことは出来るなあいつは確信しているし、そうなるように設定するあいつの能力に、俺も信頼を置いている。

www.nakedeye-online.com

ピート・タウンゼント・インタビュー

そして更に、リチャード・ジョンソンが監督する『さらば青春の光2』の話があります。実現すれば、あなたはどのようなふうに関わるのですか。

残念だが、これに関してはよくわからない。続編の「ジミーは次に何をしたか」を制作するにあたり、『Quadrophenia-さらば青春の光』の名前を使う「ライセンス」はビル・カービシュリーに口頭で与えてある。これはもちろん、フランク・ロッドの映画の最後で起こったことを克服する、ジミー次第だ。何が起こるか見たいと思っているよ。リチャード・ジョブソンは古い友人で、彼がこの辺をどうしたか、楽しみに見てみたいと思う。これ以上の適任者がいるとは思えない、彼の最初の映画を幾つか見たからね。俺にできることなら、長編映画には関わらないようにしよう。台本は重要だが、オリジナル映画で従事したマーティン・スペルマンが書いているところだ。

口にするには早すぎるのでしょうか、そのツアーのバンドはロイヤル・アルバート・ホール公演と似通ったものになるのでしょうか、主要な演奏者の他にも弦楽器や管楽器があるのか、それとも必要最小限に減らされるのでしょうか。

その質問は少し言外の含みを持っているようだ。君はあの弦楽器や管楽器に不満なようだね。ロジャーがそうしたがっていないのは知っている。君の言うように、早すぎる話だ。ここで経済的意義が影響する怖れはあるが、俺はあの弦楽器や管楽器がとても気に入ったよ、俺たちはレコードに本物の弦楽器と管楽器を使ったから、それがライブの音楽にも信憑性を与えてくれた。それに、より大きなバンドだと、俺たちはもっと静かに舞台上で演奏してもよくなるから、俺の聴力を保護して気遣いたいという俺の願望にも適している。思いきったハーモニーの豊かさを得るには、二つの方法がある。

1. ディストーションをかけた圧倒的なボリューム(ロック)
2. おびただしい数の楽器と音声
(ビッグバンド、あるいはオーケストラ・シンフォニー)

これこそが1982年の25周年ツアーでビッグバンドを使った理由だ。ほとんどのファンが好むハードで代表的なロックではないが、たまのアンコールを除けば、今や俺にとって、そっちが従来通りということになるかもしれない。

60年代の若者の感情と、最近イギリスで見られる不穏な情勢との間に、何か類似性は見られますか？

確かにこれに対しては何らかの回答を思いつくが、それは本当のところ俺の分野じゃない。俺にわかるのは、俺の世代がベビー・ブーム世代で、多数派だということだけで、そのことが色んなレベルで権威や体制を無視するパワーを与えた。今日では、少なくともイギリスにおいて、若者はもはや多数派ではない。そのシンプルな事実が、何もかもを変える。

ひとつ、詳しくてマニアっぽい質問なんですが、『ダーティー・ジョブズ』と『ヘルプレス・ダンサー』の間には、サーカスの効果音のつながりがあった、暴動に対するラジオのニュース・レポートだとか5:15の汽笛のような、それ以外のつながりはあまり合っていないように思えます。あれは何故あそこに入っているのでしょうか？他にも幾つかそういう質問があるのですが、これで終わろうと思います。

サーカス音楽ではない。あれはロン・ネヴィソンがハイド・パークの青年共産主義連盟大会で録音したものだ。ウェールズの鉦夫の一団だ。全くもって、うってつけだよ。(君はずっと綱渡りの上にいるキース・ムーンを想像してたのかい？)

ピート・タウンゼント・インタビュー

最後になりますが、ちょうど 1996 年に遡って第一号であなたがしてくださったように、当サイト「ネイキッド・アイ」へのお時間をありがとうございます、そして『ネイキッド・アイ』という曲がどんなふうに生まれたのか、何からインスピレーションを受けたのかなどを手短かに、概要を伺えないでしょうか。

あれはステージで作曲したんだよ、それに70年代初頭だと思うけど、たったひとつのツアーの、10公演ほどで発展していった。俺が当時よく仕向けていた、長くて、多くの場合、やや当ての無い、アンコールのエンディングから生まれたんだ。(キースとジョンはステージで新しいリフを素早く習得するのに挑戦しながら楽しんでいた)おそらく前列にいた誰かが俺にマリファナを吹きかけたことで、ひらめいたんだろう。その期間の幾つかのライブ公演のテープ試聴をしたのに基づき、デモの作業をした。君がウェブサイトに戻ってきてくれて嬉しいよ、マット。

(インタビュー終了)

インタビュアー: マット・ケント

**「ピート並びにザック・リークに、ボックスセットから以下の写真を提供して下さったことを感謝します。」 - マット・ケント
(キャプションはピートによる)**

Copyright © Matt Kent
著作権: マット・ケント

訳者注:

写真閲覧及び原文を読むには [ここ](#) をクリック

(Translator: Click [here](#) to see the photos and read the English version.)

写真解説: 上から順に

ジョン・ウルフ、その人なくして、ランポートは決して設立されなかったであろう。

ロジャーの見事なボーカル・パフォーマンスに親指を立て称賛するキース

汽車にて相棒達の喪失

俺に違法ドラッグを勧めるボブ・ブリデン

『四重人格』ディレクターズ・カットは11月14日発売

訳者あとがき:

この翻訳に快く掲載の場を設けて下さったマット・ケント及び紹介して下さい下さったロブ・リー両氏に感謝します。更にピートにも、彼がファンに行なってきたことに対して心からの感謝を申し上げます。

Translator:

I'd like to thank Matt Kent for giving me an opportunity to post this here, and also I'd like to thank Rob Lee for introducing me to Naked Eye. Especially, I very sincerely appreciate Pete for everything you've done for your fans.